



「にあんちゃん」著者 安本末子さん

家族愛の溢れる手記に 人々の心は揺り動かされた…

東松浦郡入野村(現肥前町入野)の大鶴炭坑を舞台に韓国出身の両親を亡くした少女が、兄弟四人で助け合い、力強く生きる日々を書いた「にあんちゃん—十歳の少女の日記」。昭和三十三年に出版されベストセラーになり、翌年、今村昌平監督によって映画化され話題となりました。この日記を書いた少女が安本(現姓三村)末子さん(茨城県在住)。

当時、入野小学校大鶴分校三年生。もともと苦しい生活の中、大鶴炭坑で働く一番上のお兄さんが仕事をやめさせられると食べるものにも困ってしまいます。お兄さんとお姉さんが仕事のために大鶴を離れ、にあんちゃん(二番目の兄)との二人暮らしは寂しく、さらに辛いものになりました。でも、貧しさにいじけることなく、明るさや優しさを忘れず、兄弟を尊敬し、前向きに生きる姿が人々の心を打ちました。

彼女の同級生だった肥前町収入役山口駿一さんは「彼女が当時どん底の暮らしをしているとは知りませんでした。それだけ、明るかったんです。エネルギー革命という大きな波が訪れた時代に、彼女の澄んだ目、澄んだ心で書かれた日記には、家族愛や兄弟愛がひしひしと伝わってきます」。昨年、山口さんから同級生の呼びかけで日記の一節と杵島炭坑大鶴鉱業所の歴史を刻んだ碑とにあんちゃんと少女のブロンズ像の記念碑が入野小学校大鶴分校跡地に完成しました。「青少年の犯罪が多発する今、もう一度家族愛、兄弟愛とは何かを見直す拠点として欲しい」と山口さん。絶版となった本の再版も計画しています。安本末子さんが日記を出版して、約50年。時代は少女の純粋な気持ちを必要としているようです。



■今なお、再版をのぞむ声が届いているという…



■昔の炭坑入口



■同級生の呼びかけで完成した記念碑

